巻頭メッセージ

複眼

「見えていない未来」に向けて

秋田経済研究所
理事長　新谷　明弘

秋田県の人口減少や少子化は、人口問題研究所による将来推計を上回るスピードで進み、秋田県の未来は失われているような印象が持たれています。秋田県の未来は失われているのでしょうか？

人口の将来推計などは、すでに「見えている未来」といえます。しかし、未来にはそこに暮らす人々の取組みや活動により、変えることのできる未来も必ずあります。これはまだ「見えていない未来」です。私たちはこのまだ「見えていない未来」に向かって、夢を持ち、目標を掲げ、取り組んでいかなければなりません。

『あきた経済』今月号に寄稿いただいた西武秋田店の飯田店長は、ある講演で「秋田の人は『寛容な秋田愛』が少し足りないのでは？」と問いかけられました。「寛容な秋田愛」が足りないと感じてしまう背景には、よく指摘される秋田県民の「秋田には何もない」という発言や、首都圏との比較で秋田を否定的にとらえる意識が働くためではないかと感じています。私たちの否定的な発言や感情は、秋田の子どもたちに悪影響を及ぼし、長じてから故郷を離れてしまう遠因にもなっている気がします。

10年ほど前の「秋田さきがけ」に、「豊かさとは」というタイトルの五城目高校演劇部の劇が紹介されていました。演劇部の創作劇は、聖農・石川理紀之助を題材にした豊かさを問う劇で、理紀之助ゆかりの里山で農業体験をした高校生たちが「豊かさを求めたら都会に行きたくなるよ」、「俺には秋田が可能性の宝庫に見える」などのセリフを交わしながら、最後に本当の豊かさについて「豊かさはどこにいるかじゃない。どれだけ自分の心が輝いているかだ。問題なのは、田舎では磨いても輝かないと決めつけている人が多いことだ。」と語りかけ、「豊かさとは」の問いに応える内容であったとしています。「それぞれ違う豊かさがあるはずなのに、私たちは田舎には何もないと考えてしまいがち。演劇を通じ、秋田で生きる豊かさとは何かを問いかけたかった。」と話す演劇部部長の言葉が強く印象に残っています。劇を創作した高校生たちの問いかけに、私たちは応えてきたといえるでしょうか？

転勤で秋田に赴任された方々からは、秋田県での暮らしや季節ごとの食文化について褒めていただく機会が多い一方で、なぜ秋田の人たちはその良さに気づかないのかという指摘を受けます。あまりに身近で当たり前となり、気付かずにいるということです。私たちは、秋田の持つ豊かさについていま一度理解を深めるとともに、秋田の今を否定するのではなく、子どもたちが住み続けたいと思える秋田にするために意識や発言を変えていく必要があります。

「秋田には何もない」ではなく、身近な魅力に気づき、「秋田にはこんな場所がある、こんな魅力がある」を発信していくことから始めてみる、それが秋田のまだ「見えていない未来」に向かう第一歩となるはずです。